

山桜の里 戸赤

戸赤の風物詩

凍み大根の「のれん」



ふれあいみなみ 12月号No187号から掲載

「小椋さん夫妻の
人柄にも魅せられて...
常連のお弟子さんたちも通う」



▲木地工房を管理する小椋さん夫妻。春から秋までは、囲炉裏で焼いた「しんごろう」も提供されているとか。



地域おこしの 伝統工芸

どあか おぐら はじめ
下郷町戸赤地区 小椋 一さん(77歳)

この人に会い
行ってきました



下郷町戸赤地区の小椋一さんご夫妻は木地作りの名人。木地とは木工芸品の素材の総称で、これにニスや漆を塗る事で「会津塗り」など伝統工芸の数々が作られます。かつては多くの職人が集う「木地の里」だった戸赤地区。10年ほど前に、町おこし事業の一環で体験工房を作る事となり、実家を提供された、小椋さんが管理人も勤められています。若い頃は大工として活躍した小椋さん。その腕前は木地を作っても健在で、作業現場を拝見しても、ろくろと一本の鉄棒で削り出す様子は圧巻の一言。工房は「予約をすれば1年中いつでもOK」との事で、この日栃木から訪れていた女性も「前回の作りかけを仕上げに来ました」と慣れ親しんだ様子で楽しそうに作業をしていました。

継承される戸赤の伝統工芸。それを受け継ぐ常連の“お弟子さん”たちも、小椋さん夫妻の人柄にも魅せられた方が多いのかな、と取材をしていて感じました。



▲取材当日も雪降る早朝から栃木や若松、昭和村の常連の皆さんが熱心に作業されていました。

「戸赤水車式木地工房」

体験料1日1000円(材料費別)

お問い合わせ：0241-67-4399

【木地の学習No.63】カンセツ カンナボウの先方を固定する輪。スリガタとドウシの接点と、カンセツ部分が定まり、一定の曲線が描けるようになる。アラビキ用スリガタ 電力ロクロ時代になるとアラガタもロクロで弾くようになるが、このとき用いるのがアラビキ用のスリガタである。動力ロクロの場合は、アラガタは三分のノリをつけるのが普通で、アラビキ用のスリガタは、この寸法に合わせて作られる。たとえば三寸九分仕上げの汁椀であれば、アラガタは四寸二分で挽くことになる。スリガタの作り方スリガタは木地職人が作るもので、これを使って木地を挽く職人をスリガタ職人とも呼んだ。作り方は、見本になる木地製品を一つ挽きで作り、それをロクロに設置する。ケイハン台の下部のスリガタを取り付ける位置に鉄板を置き、見本の木地製品にあわせてカンナボウを動かし、鉄板に傷をつけていく。その線に沿って、タガネで鉄板を切る。切ったばかりの鉄板は凸凹しているの、ヤスリでなめらかに仕上げる。文字で書くと簡単なようにみえるが、実際はこのようにスムーズにはいかず、何度も何度もヤスリで修正し、徐々に見本の形に近づけていく。スリガタ作りは大変手間がかかり、しかも根気のいる仕事で一つ作るのに一人役かかるのが普通であった。(会津地方歴史民俗資料館「木地語り」より) (続)

あけましておめでとござります



我が家の慶事のおすそ分けや、
離れて暮らす家族の厄払いで
みかんまき



消防団行事へ一人行ったため
四人で歳の神作り(赤土)

歳の神

六戸の集落が
実質五戸と
なった赤土。
歳の神作りは
一月十四日直前
の日曜日。十四
日午後七時点火。
今年には四戸六
人参加で三戸が
みかんをまいて
厄払い。その日
のつきが餅をま
るめ棒にさして
焼いてお互いに
いたたくこの昔
ながらの風習。いつか昔のよう
に大勢で火を囲
む日が来ることを願ってやまない。

れきの
ひとコマ

星丈夫さん

ちょっと
いっぴく

【11・24温泉保養の
とき】渡部利男さん
撮影

川と現道との間が道路用地

川が変わって道路が良くなる



石積み養生中



2015/01/17 11:07

(ストーリー性のある村づくりのために) [No.31] 石剣(せっけん)石刀に似るが剣状の石器で、下郷町での出土例は知られていない。伊南堂平遺跡の第一次調査で出土しているが、緑泥片岩系の石材で製作され、両端を欠損している。横位に細溝が二本観察できる。石刀(せきとう)鏃をもつ刀状の石器で、中には内反りのものもある。…独鈷石(どっこいし)仏具の独鈷に似ているのでこう呼ばれている。本町からの出土例はないが、南会津では、只見町の窪田遺跡・曲尺渚遺跡・南郷村下遺跡など縄文後期・晩期の遺跡で出土している。伊南村公民館保管の独鈷石は出土地が不明であるが、村内の馬捨場遺跡或いは上ノ台遺跡から出土したものではなかろうか。石冠(せつかん)丸い頭部と横長の基部からなる冠に似た石器である。田島の上ノ台遺跡の発掘で縄文中期に伴う石冠が出土している。馬捨場遺跡の石冠はそれ以降の後期、晩期のものと思われ、南会津西部では唯一の出で例ではあるが、伊南の大火で焼失した。…円盤状土製品・石製品 円盤状土製品は栗林・板倉両遺跡から数点出土しているが、土器片を再利用したものが多く縁をきれいに磨いたものもある。同様の石製品は田島の上ノ台・折橋C両遺跡でも出土しており、伊南堂平遺跡の第四次調査でも出土しているが所属年代は不明で、この二つは形態が類似するが用途は不明である。「下郷町史-第7巻通史編(発行・下郷町)」より出典(続く)